

# 基調講演 「人間にとって古典とは」

## 現代の状況の中で

京都大学名誉教授

藤澤 令夫

「古典学の再構築」という企図に内包される、一般的・基本的な意味と課題（Ⅰ）、および、現実的・緊急的な意味と課題（Ⅱ）、について考えてみたい。

**I** 人間はこの世界に生まれて、生きて、さまざまな行動をして、死んでゆく。

そこにはおのずから、太古以来地球上のどの地域のどの民族においても、たとえごく素朴な形にせよ、それぞれに固有の世界観や自然観、人間の生き方や行動の諸様式と価値観があって、世代を通じて伝承されるその総体が、それぞれの「文化」を形づくってきた。ただしそのなかで、明確に「古代」や「中世」を語ることができ、文字で書かれた「古典」を有する文化圏はそれほど多くない（本プロジェクトで取り上げられる中国、インド、イスラーム・イラン、イスラエル、西洋、日本など）。

かなり以前から、従来の西洋中心の世界史への反省が西洋人自身によっても（シュベングラー、トインビー、ヤスパースなど）行なわれるようになって、西洋は相対化された。本プロジェクトでも、「近代西欧特有の価値観からの脱却」が謳われている。

しかし、その西洋文化の大本になった古典期ギリシア民族は、まさにそのような自民族文化の相対性、あるいは、地域や国によって異なる習俗や価値観の多様性ということをおそらく最も早く自覚した民族であった。そのことを告げるlocus classicusは、ヘロドトスの歴史書Ⅲ38である。その箇所ではヘロドトスは、習俗の違いの極端な例として、死んだ親の葬い方を挙げるが、（ギリシアでは火葬、インドのある部族ではその肉を食べる）、どこの人間もそれぞれ自分のところの習俗を最良と信じていること、それにもかかわらずペルシア王カンビュセスが遠征中、他国の信仰や習俗を嘲笑したことを述べて、そのことを王の錯乱狂気の証拠として語っている。

前5世紀末ごろにギリシアのドリス地方の方言で書かれた『両論』（ディッソイ・ロゴイ）には、ある行為の美醜の価値観が所によって逆である多くの例が列挙され

ている（マケドニアでは、結婚前なら娘が恋をして男と交わることは美、結婚後は醜、しかしギリシアでは両方とも醜。リュディアでは、娘が身を売って結婚資金をつくるのは美、しかしギリシアでは、そういう女とは誰も結婚しないだろう、などなど）。筆者不明のこのような文書にさえもこうした記述が見られることから察して、この種の文化相対性の意識は、古代ギリシア人の間にかなり一般的だったのである。これを背景に前5世紀中葉、「ノモス」（習俗、法律）と「ピュシス」（自然本来）との対比によって物事を裁断する時論が、思想界に衝撃を走らせた。

こうしたことは、ギリシア人が旅を好み、よく旅をしたことによるところが大きいと思われる。この習性は後に、同時代のほかの民族に類のないような、アジア・アフリカ・ヨーロッパに及ぶストラボン（前1世紀～後1世紀）の大著『世界地誌』（全17巻）を生み出した。

旅によって人は、いわゆる「カルチャー・ショック」を、すなわち「驚き」（タウマゼイン）を経験する。プラトンは（またアリストテレスも）、「タウマゼイン」は「哲学の出発点」であると言った。自己の特性、他者との相違の経験によってこそ、では何がほんとうに「よい」ことなのか、という問の発動が可能になる。ちなみに、「哲学する」という語の最古の用例は、偉大な旅行家であった政治家ソロンについて語られたものである（ヘロドトス、I 30）。

地域や民族ごとに異なる「文化」（習俗、掟、信仰など）を観察する、このような古代ギリシア人の「旅」の現代的ヴァージョンは、「比較文化（文明）学」「民族学」といった学問領域であろう。「古典学の再構築」を企図する本プロジェクトは、このような「旅」を、「古典」のレベルで行なおうとするものである。

趣意書では、「古典」は「人間と世界に関する精選された知識の集成」と言われている。そうであるならば、あるいは、そこまで厳しく規定しないとしても、選ばれて長い幾春秋を経て今日に伝えられた典籍には、おのずから、各文化圏の最古層にあってそれぞれの伝統を形づくってきた世界・自然の見方、物の考え方、心性、習俗、価値観が看取されるであろう。ならば、それらに関する着実な知見を単に持ち寄るだけでも、それは古代ギリシア人の「旅」の、さらに広規模かつ高精度の再現にほかならず、きわめて重要な意義をもつ。まして、それによ

る「タウマゼイン」が駆動力となって、さらなる問が発動されるならば

II ソクラテスはギリシア人としては、出征以外には国外へ旅をしなかった風変りな例外であったが、対話による「思想の旅」には精を出した。プラトンによれば、彼にそういう「旅」をさせた最も基本的なモチーフは、「(ただ)生きること(ゼーン)でなく、よく生きること(エウ・ゼーン)をこそ、何よりも大切にしなければならない」という命題で表わされるものであった。この平明な命題はしかし、歴史的に思いがけない長大な射程をもつことになって、いま、現代文明の本性を(私の実感では)強烈に照射している。そしておのずからまた、古典学の現実的課題をも。

そのことをここでは、大昔から人間の切実な関心事であった医療・医学のあり方を通じて考えてみよう。

古来、西洋・中国・インドの各文化圏はそれぞれの自然観と人体観に応じた固有の医療・医学を伝えてきた。そのなかで、現時点では、西洋のそれが他と異なる際立った特色(即効性と副作用)をもっていて、中国やインドの医療・医学と明瞭なコントラストをなしている。

しかし西洋においても、その伝統の淵源にある古代ギリシアまで遡って俯瞰すれば、東洋のそれと考え方の上で相通じる医療・医学が、長らく本流をなしていた。いつから、いかなる理由によって、現在のような西洋医学が古来の伝統から分岐し、勢力を拡大するようになったのか。普通行なわれるように、近世以降の合理主義や科学だけに視野を限ることなく、人間の本性にまでつながるような、古代以来の事の経緯に目を据えてみよう。

ギリシア最初期(前6世紀)の哲学者、アナクシメネスの言葉を見る。

「空気であるところのわれわれのプシューケーがわれわれを統括しているのと同じように、宇宙全体を pneuma と空気が包括している」(断片2)

プシューケー(生氣、魂)と pneuma(氣息、精霊、ラテン語で spiritus)による、自然万有(大宇宙)と人間(小宇宙)との一体的統一。古典期ギリシア哲学に共通するこの思想は、ヒポクラテス文書からガレノス医学に至る、ギリシア医学(生理学)の本流に脈々と伝えられた基本思想ともなったが、同時にまた疑いもなく、中国の『黄帝内経』やインドのアーユル・ヴェーダの『チャラカ本集』『スシュルタ本集』などの、東洋古典医書の基底に見られる思想と相通じている。中国の気は古代ギリシアのプシューケーとほとんど同じといってよく、それが固体とも液体とも気体ともなることや、天地(大宇宙)と人(小宇宙)とが気による感応関

係にあることなど、アナクシメネスの哲学思想と酷似している。自然と人間との一体性はアーユル・ヴェーダの基本思想でもあるし、また森羅万象(天、地、日、月、雷、風、火、水、etc.)のそれぞれに神性を認める多神教的思想も、古代ギリシアの場合と同じである。私は東洋医学については素人であるが、以上の範囲のことは、言うことを許されるだろう。

このように基本的な親近類縁の思想に支えられた三つの文化圏の医学のうち、古代ギリシアに発する西洋医学だけが近現代までに、根本的といえるような変質を遂げた。そのことの根深い誘因は、私には、次のことにあると思われる。

古代ギリシアの自然哲学は、上述のように万有の根元(アルケー)をプシューケーとみなしながらも、その「物質」としての基本位相(タレスの「水」、アナクシメネスの「空気」など)を何と特定するべきかを問い続けた点に特色がある。前5世紀の終り近くになって、その一帰結として、デモクリトスらの原子論が提出された。これは、自然の万象はプシューケーをも含めて「原子」と呼ばれる完全剛体の微粒子から構成されていると説く、物一元の要素還元的な自然観にほかならない。

古代原子論は医学にも流用されたが(「メトディコイ」と呼ばれる、ガレノスと同時代の学派)、主流とはなりえず、自然哲学一般としてもプラトンはアリストテレスに反論され、中世を通じてほとんど完全に無視されたけれども、しかし近世初頭に活発にリバイバルして、その物的・要素還元的な自然観は自然学・医学を主導するようになった。これが他の要因(特に、厳密学問を価値中立的な純粹のテオーリアー(観想、理論)とみなすアリストテレスの思想)とも相まって、やがて「自然科学」を成立させることになる。

原子論のこのしたたかさは、何に因るのか。それは何よりも、生物としての人間の本性(本能)に支えられていることに因ると思われる。「触れる」「掴む」「ぶつかる」の対象である物、人間の生物的生存に最も直接的な関わりをもつ。物としての構成要素だけに着目した自然像(また人体像)は、その意味で、生存と行動の直接的有効化を求める人間の本能が描き出す描像にほかならず、まさにそれゆえに、事象の説明にあたって強い説得力と直接的な実効性をもつのである。その実効性はまた、物としての構成要素を手掛りに、その組み変え配列変えによって新たな人工化学物質を実際に作り出す実効性でもある。

こうして、医学が自然科学の一領域となって、人体が物から成る物質系とみなされるとき、病気の診断と

治療は、もっぱらその部分部分の精査に向けられ、部分(部品) = 臓器の修理(あるいは新品との取り替え)が医療の正規の路線となる。そして、ある症状を症状そのものとして見るだけでなく、その症状を引き起こしている「原因」(アイティオン = 「責任者」)を 物 の形(細菌、ウィルス、ガン細胞、欠陥遺伝子、など)で特定し、その原因 = 責任者を、そのためだけに作られた人工化学物質によって狙い撃つという戦略は、当然めざましい即効性を発揮する。日本では、近代西洋医学のこの即効性に脱帽して、1895年(明治28年)に「漢方医学廃止」の帝国議会決議が行なわれた。(中国でも一時、1929年、中国伝統医学の廃止が決められたことがあると聞く)。

他面しかし、この有効性(即効性)は、上述のようにあくまで直接的な有効性であって、間接的あるいは最終的には何が起るか保証の限りではなく、事実例えば薬としての化学物質の多用は、副作用として数々の深刻な薬害を引き起し、また新たな耐性菌を産出してきた。さらに、物 の局面だけを抜き描きした自然像・人体像からは、プシューケー(魂、生命)とそれに関わる諸価値が最初から排除されているから、この人体観に基づく(例えば)延命医療技術のひたすらなる推進は、人間の生命を救う大きな恩恵を与えてきた反面、その最先端において、もともと排除されていた他の精神的価値と衝突して、いわゆる生命倫理問題を引き起すことが避けられない。

以上のような、今日の西洋医学が大本のギリシア的伝統(中国やインドの思想と通底)から分岐して成立した経緯、そしてその経緯ゆえに現代西洋医学が不可避的に呈さざるをえない正負両面の際立った特色 即効性・効率性と、副作用 は、そのまま現代の科学技術文明全般の成立経緯とその特色を集約した、鮮明な縮図をなしている。

ここで、この章(Ⅱ)の最初に見た、ソクラテス(プラトン)の根本命題に立ち帰ってみよう。「(ただ)生きること(ゼーン)でなく、よく生きること(エウ・ゼーン)をこそ、何よりも大切にしなければならない」。

この命題を敷衍するプラトンの論述の骨格を抽出すると、次のようになる。

「(ただ)生きる」「生き延び」原理と呼ぼう) 金銭・権力志向。そして死の恐怖と生き延び願望、すなわち生物的生存の直接的な有効化への希求。自然観としては、専ら 物 の局面に目を向け、プシューケー を二次的・派生的存在とみなす。

「よく生きる」「精神」原理と呼ぼう) 魂(プシューケー)の卓越性と 知 への希求。そして生き延びにとられず、人間としてのトータルな価値を志向する。自

然観としては、プシューケー を基本に据えて、物を二次的・派生的とみなす。

これに照すならば、今日の科学技術文明とは、「生き延び」原理を強力に理論武装して、それを現実に具体化した姿にほかならない。「(ただ)生きること」なくして「よく生きること」はありえないから、人間の生物的生存の直接的有効化ということは、それ自体としては大きな価値であり、ある段階までは無条件的に、人間に多大の恩恵を与えてきた。他面しかし、(1)その「有効化」はあくまで直接的また部分的(局所的)な有効化であって、間接的あるいは全体的場面で何が起るかかわからないことは、先に西洋医学について述べた通りである。また、(2)その価値はあくまで単一の価値であって、人間にとってのトータルな価値と重なるものではない。生存の直接的な有効化(利便、効率性、快適性)がますます加速度的に達成されつつあると共に、反面、(1)(2)の点に由来する、そのマイナスの波及効果があらわに顕在化するようになったのが、まさに現代の科学技術文明の状況にほかならない。例えば

(1') 今や地球を包む大気までも巻き込むに至った自然環境破壊。「生き延び」原理専一の追求が、逆に人類の「生き延び」にとっての脅威をもたらした。

(2') 他の精神的諸価値との軋轢。延命医療技術の最先端にそれが現われることは、先に述べた。また次々と新たに提供される利便を追い求めることによる、物質的欲望水準のとめどなき上昇。一般に、「精神」原理抜きのあるいはその稀薄な文明の中で、金銭(経済)と効率のみを基軸とした価値観の蔓延は、必然の趨勢というほかはない。

喧伝されることの比較的多いのは(1')であるが、真に恐るべきは(2')のほうであろう。なぜならそのベクトルは、紛れもなく、人間が本来の人間でなくなる方向を指し示しているからである。

「科学技術創造立国」は、学術に関するわが国の国策である(学術審議会)。しかしそれに携わる理工系学問は、事象の 物 の局面の知見を推進することによって、事実上「生き延び」原理の理論武装に専従してきたのであれば、この一世風靡の勢力に抵抗する知の営為は、文系の学問でしかありえない。そしていうまでもなく、「古典学」は文系学問の母胎である、各文化の最基層にかかわる学問である。そこに洋の東西に通底して確立していた、「文系」と「理工系」との不自然にして非本来的な学問領域の乖離以前の、人間にとって本源的な世界・自然の見方を、今こそ再生させなければならない。それが、「真に人間であること」を死守するための砦にほかならないのだから。